

病理部 卒後臨床研修プログラム（選択）

I 研修プログラムの目的及び特徴

この研修プログラムは日本病理学会の推薦案および厚生労働省の研修要綱を参考にして、千葉大学医学部附属病院病理部が作成した独自のプログラムである。

「医療の安全」、「EBM（Evidence-Based Medicine）」、「評価と説明責任」は医療の分野のみならず社会のすべての分野でキーワードとなっている。病理形態診断学こそEBMの基礎をなすものであり、本研修を行うことにより患者治療の基礎をなす病理診断学の重要性を認識し、今後の臨床医としての基礎を確立することを期待する。また、将来、基礎研究を志す医師にとっても、病理診断学が研究思考過程での礎となるはずである。さらに、将来、病理医になることを選択肢として考慮している医師には病理診断学の基礎を学ぶことで、将来の進路決定に有用な体験となるはずである。

この研修プログラムを実践することで、

1. 病理診断学が医行為の重要な一翼をになうものであることを学ぶ。また、臨床情報と病理所見を総合して診断することの重要性を認識する。
2. 病変を個別の臓器に限定せず、患者さんの全体像の中において理解することの重要性を学ぶ。
3. 検体の種々の処理方法を学び、必要な病理学的検索に適切に対応できるようになる。
4. 免疫組織化学染色などの特殊検索法の基本を経験する。
5. 臨床像と肉眼・組織像を統合して疾患を理解し、的確な鑑別疾患を列挙できる。
6. 最低限レベルの組織・細胞像を解釈できる。
7. 初期臨床研修制度で必修項目とされているCPC（臨床病理検討会）研修を経験することができる。

II 研修プログラム責任者

プログラム総括責任者：池田 純一郎（部長、教授）

III 研修指導医

指導医：池田 純一郎（教授）、松坂 恵介（准教授）、太田 昌幸（助教）

IV 研修プログラム

研修施設は千葉大学医学部附属病院病理部のみである。研修プログラム責任者が配置を決定する。研修期間中は指導医によって教育、評価が行われる。

V 募集定員

希望者を随時受け付ける。特定期間に人数が多い場合は総合医療教育研修センターと日程を調整する。

VI 教育課程

1. 研修開始年度 当該年度の4月1日

2. 期間割と研修医配置予定

千葉大学医学部附属病院病理部で行われている業務は、病理解剖、細胞診診断、組織診断（術中迅速診断を含む）などの形態診断学と各臨床科とのカンファレンスである。これらすべての業務に積極的に参加する。

短期の場合は、病理解剖、細胞診診断、組織診断について必要最低限の基礎知識を身につける。

長期の場合は、上記短期コースの内容に加え、特殊検査方法[免疫組織・細胞化学的検索、電顕的検索、分子生物学的検索]を修得する。

3. 一般目標（GIO）と行動目標（SBOs）

（1）病理解剖

GIO

研修医が病理解剖を通じて臨床経過と疾患の本態の関連を総合的に理解する能力を身につける。

SBOs

- ① 病理解剖の法的制約・手続きを説明できる。（想起）
- ② ご遺族に対して病理解剖の目的と意義を説明できる。（解釈）
- ③ ご遺体に対して礼をもって接する。（態度）
- ④ 臨床経過とその問題点を的確に説明できる。（問題解決）
- ⑤ 病理所見（肉眼・組織像）とその示す意味を説明できる。（問題解決）
- ⑥ 症例の報告ができる。（解釈）

（2）細胞診診断

GIO

研修医が細胞診診断の必要性和細胞所見を理解する能力を身につける。

SBOs

- ① 細胞診検査が必要な疾患を想定できる。（想起）
- ② 患者や臨床医に細胞診検査の目的と意義を説明できる。（解釈）
- ③ 検体に対して真心をもって接する。（態度）
- ④ 臨床経過とその問題点を的確に説明できる。（問題解決）

⑤ 細胞所見とその示す意味を説明できる。(問題解決)

⑥ 症例の報告ができる。(解釈)

(3) 組織診断(術中迅速診断を含む)

G10

研修医が組織診断の必要性和組織所見を理解する能力を身につける。

SBOs

① 病理組織検査が診断・治療においてとくに有用な疾患を想定できる。(想起)

② 患者や臨床医に病理組織検査の目的と意義を説明できる。(解釈)

③ 検体に対して真心をもって接する。(態度)

④ 臨床経過とその問題点を的確に説明できる。(問題解決)

⑤ 肉眼所見から適切な鑑別疾患を挙げることがができる。(問題解決)

⑥ 最も代表的な病変を肉眼的に指摘し、経済効果を加味した必要最小限のサンプリングができる。(問題解決)

⑦ 組織所見とその示す意味を説明できる。(問題解決)

⑧ 最終診断に到達するための特殊染色を理解できる。(問題解決)

⑨ 病態に応じた適切な報告ができる。(解釈)

(4) カンファレンス、発表

G10

研修医が遭遇した疾患をカンファレンス・報告論文などで適切に発表する能力を身につける。

SBOs

① CPC(臨床病理検討会)レポートを作成する。

② 臨床カンファレンスで症例呈示を行う。

③ 稀少例や臨床病理学的に重要と考えられる症例を医学雑誌に投稿する。

4. 経験すべき検査手技

- ・ 解剖技術
- ・ 切り出し、サンプリング
- ・ 標本作製技術(包埋、薄切、一般染色)
- ・ 免疫細胞・組織化学的染色
- ・ 電顕資料作成
- ・ 肉眼標本、組織標本撮影

VII 週間スケジュール

曜日	午前	午後
月曜日	症例検討会	臨床各科とのカンファランス（婦人科、小児科、消化器内科、皮膚科）
火曜日		
水曜日		エキスパートパネル
木曜日		解剖症例臨床病理検討会（CPC） 呼吸器外科・内科
金曜日		

VIII 評価方法

1. 病理部長により総合評価が行われる。
2. 研修終了日に千葉大学にて研修報告会をおこなう。各研修医は、病理部研修の体験を発表する。
3. 指導医により各到達目標に対する評価が行われる。
4. 研修医は各到達目標に対する自己評価表を提出する。